



東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩

No. 30

～三博協 30 周年記念号～

目次

【三博協 30 周年】・・・1

- 「三博協のことなど」町田市立博物館 畠山豊
- ミュージアム多摩目録
- 三博協 30 周年によせて
 - 「三博協の 30 年に想うこと」東村山ふるさと歴史館 増田泰重
 - 「文化の点と線—三博協に期待をよせるもの」調布市郷土博物館 関口宣明
 - 「転換点だったかもしれない—三博協 30 年によせて—」府中市郷土の森博物館 小野一之

【会員館活動報告】・・・7

瑞穂町郷土資料館 檜原村郷土資料館 国立ハンセン病資料館 清瀬市郷土博物館 奥多摩水と緑のふれあい館
東大和市立郷土博物館 くにたち郷土文化館 立川市歴史民俗資料館 福生市郷土資料室 武蔵村山市立歴史民俗資料館
東京都埋蔵文化財センター 集合住宅歴史館 八王子市郷土資料館 多摩六都科学館 たましん地域文化財団
青梅市郷土博物館 羽村市郷土博物館 小金井市文化財センター パルテノン多摩歴史ミュージアム
江戸東京たてももの園 日野市郷土資料館 東京農工大科学博物館

【新規入会館紹介】・・・20

八王子市こども科学館

【会員名簿】・・・裏表紙

2009.3

東京都三多摩公立博物館協議会

◆三博協 30 周年◆

三博協のことなど

町田市立博物館 畠山豊

「三博協」、正しくいうならば「東京都三多摩公立博物館協議会」の発足は、昭和 53 年（1978）7 月 15 日のことで、本年度で創立 30 周年を迎えました。その前身である「館長会」の発足は、さらに 4 年をさかのぼる昭和 49 年 8 月 16 日のことです。そして今年、奇しくも東京都博物館協議会（都博協）の創立 40 周年であり、また日本博物館協会（日博協）の創立 60 周年といえます。

最初から私事となり恐縮ですが、私が町田市の博物館に学芸員として採用されたのは、昭和 48 年 7 月のことで、この 3 月で定年を迎えます。本誌『ミュージアム多摩』編集委員会から「三博協の 30 年」と題し執筆依頼を受けたのですが、単に年齢を重ねただけで、三博協に特に貢献したという訳でもありませんし、また知っていることも限られておりますので、十分なものではありませんが記憶に残ることなど少しを記してみたいと思います。なお、三博協の 30 年については、東京都三多摩公立博物館協議会報『ミュージアム多摩』の既刊 29 冊が基礎資料になります。また昨年度発行の『ミュージアム多摩』No.29 には、八王子市郷土資料館で学芸員を務めておられた佐藤広さん（現・八王子市総合政策部市史編纂室長）が『「多摩の博物館小史」体験メモ』を執筆されておりますので、併せてお読みいただければ幸いに存じます。

* *

昭和 48 年末のことだったか年が明けてからのことだったか、また日博協だったか都博協だったか記憶が定かではないのですが、その会合の帰途に府中市郷土資料館の故横尾友一さんと前述の佐藤広さんとの 3 人で喫茶店でコーヒーを飲みながら話しをしていたときに、横尾さんから多摩の博物館の連絡会のようなものを作りたいとの提案があり、それがきっかけだったように思います。無論、私達には異論ありませんでした。横尾さんは私より少し年長で、私達のリーダー的存在であり、また既に日博協や都博協の活動にも積極的に参加していました。何がどのように進んだのか記憶がはっきりしないのですが、昭和 49 年 5 月 24 日に「多摩公立博物館職員連絡会」の研究会が開かれています。ただし、この会は同年 8 月 16 日の館長会の発足により発展的に解散しています。館長会の中で、その活動を行なうということだったかと思えます。その頃の多摩の地域博物館は、東村山市立郷土館（現・東村山ふるさと歴史館）・八王子市郷土資料館・府中市立郷土館（現・府中市郷土の森博物館）が既に有り、町田市郷土資料館（現・町田市立博物館）・青梅市郷土博物館・調布市郷土資料館が昭和 48 年から翌年にかけて立て続けに開館しました。これら各館の館長がメンバーとなり館長会議が発足したのですが、その設立の実際にあたったのは、八王子市郷土資料館の小泉恵

一館長や横尾友一さん達でした。小泉館長や横尾さんが亡くなられた今、この頃のことを知っているのは当時小泉館長のもとにいた佐藤さんぐらいかもしれません。

館長会での思い出という、各館の館長さんがどなたも際立って個性的だったことが印象的です。八王子の小泉館長、府中の朝倉館長、青梅の稲葉館長、調布の狩野館長、今でも目に浮かぶ方達ばかりです。八王子の小泉館長は、退職直後にヨーロッパの博物館視察に出掛けた折りの飛行機事故で亡くなられましたが、体験学習に主眼をおいた清瀬市郷土博物館の設立に尽力されたことは、長くそばに仕えた佐藤さんが本誌前号に記したとおりです。三博協の設立に大いに尽力されました。府中の朝倉館長は図書館の館長と兼任されておられましたが、飄々とした風があり、退館後は確か杉並の郷土資料館の館長を務められたかと思えます。大国魂神社の暗闇祭りに出掛けた折り、資料館で酒を勧められ閉口したことがありました。青梅の稲葉館長は、お宅が文化財指定になっていたかと思えます。文人館長という風でした。何かのことでお訪ねした折り、外出される家族の方が三つ指をついて挨拶されていたのを見て、旧家のご主人の一面を垣間見た気がしました。調布の狩野館長は、ずばり直言される方という印象があります。町田の館長は、美術史家の水沢澄夫氏でしたが、就任後 1 年程で亡くなられました。水沢館長は、エジプト美術に造詣が深く、年配の方は記憶にあるかと思いますがツタンカーメンの展覧会の企画に携わりました。写真家の土門拳氏や作家の中野重治氏と親しく、お二方とも館にも時々お見えになっていました。水沢館長のあとに就任されたのが千沢禎治館長で、東京国立博物館を学芸部長で退官し、町田と共に山梨県立美術館の館長も務め、同館の有名なミレーの絵の収蔵に尽力されました。館長会議の会場は回り持ちで、2 ヶ月に 1 度ほど開かれており、館長のお供で何度か出掛けましたが、情報交換と歓談が主だったように思います。

* *

館長会議の中で職員間の交流も始まったのですが、記憶に残るのは民俗・民具の研究会の背負子の会のことです。佐藤さんや私の担当分野が民俗・民具だったこともあり、仲間内での勉強会を開かないかということで、取り合えず各館の民俗担当学芸員に声をかけ、府中の松本さん、青梅の大河内さん、調布の関口さんなどが集まってくれました。皆博物館に入りたてで若かったこともあり、月 1・2 回づつ集まり勉強会を始め、会名も背負子（しよいこ）の会と名付けました。背負子は背負い運搬具の一つで、多摩の台地・丘陵地・山間地に広く見られます。背負子の会の活動では、大阪の国立民族学博物館に移送

する前の品川にあった文部省史料館（現・立川市）で保管していたアチックミュージアム旧蔵資料を中村たかを氏（元国立民族学博物館教授）のご配慮で見学させていただいたことが記憶に残ります。皆で史料館近くに宿をとり、泊り込みで色々を見せていただきました。また西多摩郡松原村で背負子の調査を行なったりしました。松原の本宿に宿をとり、随分と方々を回りました。この調査については、小さな報告書が出ています。背負子の会は暫く活動を続けたのですが、諸事情から活動が低調になり、後に神奈川県内の公立博物館の民俗担当で組織する勉強会パラサイトと合併し解消したかたちになりました。パラサイトは関東民具研究会の名で唐辛（脱穀具の一つ）や講中蔵などの報告書を刊行しています。また関係の有志により、『多摩民具事典』を刊行しました。府中市郷土の森博物館で日本民具学会の年会を開いたことがあります。この折にはパラサイトのメンバーが手伝いました。かつての背負子の会のメンバーとし感慨深いものがありました。現在のパラサイトについては、多摩域の博物館からも何人かの民俗担当の学芸員が参加しています。

* * *

館長会名の4年程の活動の後、昭和53年7月に三博協と改称するのですが、その時点での会員館は前述6館に加え、瑞穂町郷土資料館と奥多摩水と緑のふれあい館が増え8館になっています。会報『ミュージアム多摩』の創刊号は、昭和54年12月1日の発行ですが、巻頭に会長朝倉雅彦氏による「創刊にあたりまして」があり、発会の経過などが記されており、会員とし羽村と福生の教育委員会が新たに加わっています。そして創刊10年の後の第10号は平成元年3月15日の発行ですが、同じく朝倉氏による「想い出すことなど」の寄稿があり、発会の頃の想い出などが記されています。この時点での会員館は、先述に加え武蔵村山・五日市・清瀬・立川・松原・日野の各市町館と農工大の繊維博物館・東京都の高尾自然科学博物館・武蔵野郷土館・井の頭自然文化園の計20館となっています。

この頃の活動については、会長館を引き受けた折りのことが私には記憶に残る程度です。情報交換に加え研修としゲストを招き講演をお願いするようになりましたが、町田が担当の時には伝があり、NHKの日曜美術館の司会をしていたアナウンサーの国井雅比古氏にお願いしたりしました。

三博協の活動が皮剥けたようになったのは、平成になった前後頃からのことでしょうか。昭和62年に府中市郷土の森博物館とパルテノン多摩歴史ミュージアムが開館していますが、共に従来の多摩域の博物館とは異なるものでした。若手の学芸員も増え育ちつつあり、その方達が活動の原動力になりつつありました。特筆して良いと思うのは、三博協の中に企画委員会が設けられ、その活動が始まったことです。各種研修会の実施や「多摩の博物館さんぽ・催し物案内」の刊行などは、その成果といえます。府中の小野さん・多摩の金子さん（現・静

岡大学）・日野の峰岸さんなどが積極的に参加されましたが、そのことについてはいずれ小野さんあたりにまとめていただければと思っています。

* * *

三博協の現在は、昨年度に国立ハンセン病資料館、今年度に八王子市子ども科学館が新たに加わり29館を数えます。30年の活動の内には、東京都高尾自然科学博物館の廃館など残念なこともありましたが、まずは順調かと思えます。先日、会長館の調布市郷土博物館で平成20年度第2回役員会が開かれ、私も昨年度会長館の役員として参加しましたが、本稿の執筆と共に個人的にも思い出深いものがありました。企画委員会等でお世話いただいた調布の金井安子さんは、入職したばかりのことだったのででしょうか、『ミュージアム多摩』の昭和54年の創刊号に「博物館に来て」と題し寄稿されています。また第2号には、同じく調布の小野崎満さん（現・副館長）の若々しい時のお写真が掲載されています。

お終いに自身のことなので気が引けるのですが、多摩の博物館に過ぎしお世話になった多摩の博物館や学芸員の方々のことについて少し記させていただきたいと思えます。私の担当分野が民俗・民具でしたので、その方面に偏るのですが。昭和63年春に民俗学講演会「多摩の年中行事」を開催しましたが、この折には福生市郷土資料室の宮田満さん、清瀬市郷土博物館の故山中久子さん、八王子市郷土資料館の佐藤広さん、調布市郷土博物館の関口宣明さんに、また翌々年開催の「多摩の食生活」では清瀬市郷土博物館の浅野久枝氏に夫々の地について講演をしていただきました。この折には、多摩周辺域の博物館の民俗担当学芸員にも参加いただき、終了後の懇親会は参加者の交流に少しは役立ったかと思っています。展覧会としては、昭和61年に「多摩の三匹獅子舞」展、平成3年に「多摩の民俗 養蚕信仰」展と「多摩の民具 江戸時代の農具」展を開催させていただき、関係機関や学芸員の皆様にお世話になりました。なお多摩の三匹獅子舞については、平成15年にパルテノン多摩歴史ミュージアム開催の「落合白山神社の三匹獅子舞 都市化とともに変わる「伝統」」展に際し図録に「風流獅子～多摩の三匹獅子舞～」と題し寄稿させていただき再考する機会を得ました。

* * *

三博協と私自身の博物館暮らしの絢い交ぜとなった纏まりのつかないものとなってしまいました。お読みいただいた方に申し訳ないものの、これまでを振り返る良い機会を与えていただいたと思っています。

府中市郷土の森博物館では、先年他館との共同テーマによる従来の多摩では行なわれていなかった展示が行なわれました。またパルテノン多摩歴史ミュージアムの近年の展示では、これも従来なかった都市化などのテーマに取り組んでいます。新しい波が確実に来つつあるように思います。100年に1度といわれる不況は、多摩の博物館にも影響を与えつつあるようですが、三博協の今後の積極果敢な活動を期待したいと思います。

◆ミュージアム多摩目録◆

三博協 30 周年を記念して、機関紙「ミュージアム多摩」の目録一覧を掲載します。これまで蓄積されてきた情報を、是非ご活用ください。※執筆者名や所属は刊行当時のものです。

No.	タイトル	執筆者	所属	発行年
創刊号	創刊にあたりまして	朝倉雅彦	会長	1979年
	【博物館活動のお知らせ】展示会、教育普及活動、出版物、調査研究、文化財の動向、友の会及び外郭団体の活動、人事消息	加盟館		
	昭和 55 年 4 月の開館をめざして	宮田満	福生市教育委員会社会教育課	
	博物館に来て	金井安子	調布市郷土博物館	
	【テーマ小論文】地域博物館と郷土	小泉恵一	八王子市郷土資料館	
	【博物館紹介】奥多摩郷土資料館			
	【職員紹介】	遠藤吉次	府中市立郷土館	
【新収蔵資料紹介】大津絵	町田市立博物館			
2	三博協の進展に想う	三博協機関紙編集委員会		1981年
	【博物館活動のお知らせ】展示会、教育普及活動、出版物、調査研究、文化財の動向、友の会及び外郭団体の活動、人事消息	加盟館		
	新しい博物館をめざして“府中市郷土の森博物館建設工へ”	横尾友一	府中市立郷土館	
	地方自治と博物館について	関谷紋次郎	八王子市郷土資料館	
	レタリング文字を書きたい方へ	和田弘美	町田市立博物館	
	【博物館紹介】瑞穂町郷土資料館			
	【職員紹介】	小野崎満	調布市郷土博物館	
【新収蔵資料紹介】印刷機	府中市立郷土館			
3	ごあいさつ	千澤楨治	会長	1982年
	武蔵村山市立歴史民俗資料館開館			
	【博物館活動のお知らせ】展示会、教育普及活動			
	山村のくらし	大館勇吉	奥多摩郷土資料館	
	八王子市郷土資料館における博物館実習	佐藤広	八王子市郷土資料館	
【職員紹介】	宮田満	福生市郷土資料室		
4	町立五日市町郷土館 三つの部門と一つのねらい			1983年
	開館から 1 年を経過して	乙幡正義	武蔵村山市立歴史民俗資料館	
	民家の解体、移築について	島田秀男	羽村町教育委員会	
	アメリカ東部の博物館を訪れて	金井安子	調布市郷土博物館	
	繊維博物館友の会—その発足と運営の実例	並木覚	東京農工大学工学部附属繊維博物館	
【展示活動のお知らせ】				
5	博物館実習の受入れと友の会活動～三博協協議会報告から～	石川博幸	府中市立郷土館	1984年
	小泉さん 安らかに	朝倉雅彦	会長	
	最近の展示から	新井二郎	東京都高尾自然科学博物館	
	中国西域の博物館を見学して	加島勝	町田市立博物館	
	【職員紹介】	盛吉順一	八王子市郷土資料館長	
	【新収蔵資料紹介】点刻石、埴石	宮崎雄二	瑞穂町郷土資料館	
【昭和 58 年度展示活動報告】				
6	成長する博物館をめざして—羽村町郷土博物館 4 月オープン—	桜沢喜作	羽村町教育委員会	1985年
	(仮称) 清瀬市郷土博物館の展示について	山中久子	清瀬市郷土博物館開設準備室	
	立川市歴史民俗資料館(仮称)の設置について	望月登	立川市教育委員会社会教育課長	
	「オオムラサキの誕生」	栗原達夫	五日市町立五日市町郷土館	
	パードカービングによる展示	新井二郎	東京都高尾自然科学博物館	
	【職員紹介】	加藤研	青梅市郷土博物館管理係長	
	【収蔵資料紹介】硬玉製垂玉、滑石製垂玉	奥多摩郷土資料館		
【昭和 59 年度展示活動報告】				
7	調布市武者小路実篤記念館開館にあたって	加藤光太郎	調布市郷土博物館	1986年
	虎の居ない動物園のトラ展	小杉雄三	東京都井の頭自然文化園	
	狭山考	栗原仁	瑞穂町郷土資料館	
	先人と今	小山末雄	東村山市教育委員会社会教育課	
	多摩の博物館(三博協加盟館をのぞく)			
	【昭和 60 年度展示活動報告】			

8	府中市郷土の森がオープン 自由民権資料館誕生とその目指すもの	新井勝紘		1987 年
	町田市立国際版画美術館開館にあたって	今井圭介	町田市立国際版画美術館普及係	
	生涯教育と博物館	金子六郎	東京農工大学工学部附属繊維博物館前館長	
	実習生から学芸員へー新米学芸員の1年ー 【昭和 61 年度展示活動報告】	伊藤陽子	調布市武者小路実篤記念館	
9	ペルガモン美術館とプラハ工芸美術館を訪ねて	川松康人	町田市立博物館	1988 年
	八王子地域史研究会について	細谷勘資	八王子市郷土資料館	
	学習会の企画から自主サークルの結成までー植物画教室の場合ー 【昭和 62 年度展示活動報告】	宮林一昭	福生市郷土資料室	
10	檜原村郷土資料館の開館にあたって 想い出すことなど	朝倉雅彦	元府中市立郷土館々長	1989 年
	【教育普及事業紹介】米作りの体験学習について 【昭和 63 年度展示活動報告】	小野一之	府中市郷土の森	
	日野市ふるさと博物館の公開について			
11	寿福寺所蔵の大般若経と八王子に関する中世資料 【平成元年度展示活動報告】	細谷勘資	八王子市郷土資料館	1990 年
12	「五大昔噺ー江戸期よりの絵本ー」展	清瀬市郷土博物館		1991 年
	民俗学と博物館ー市民との接点からの雑記ー	佐藤広	八王子市郷土資料館	
	歴史博物館の固有の機能ー「江戸東京博物館」を考えるー 【平成 2 年度の活動から】	小泉弓子	歴史科学協議会	
	博物館と体験学習ー立川市歴史民俗資料館増築にあたってー	佐藤高之	立川市歴史民俗資料館長	
13	郷土博物館を建設中	東大和市教育委員会社会教育課		1992 年
	薫工品を作るー体験学習の一例 【平成 3 年度の活動報告と平成 4 年度の活動計画】	服部敬史	八王子市郷土資料館	
	古代ガラスのはなし	川松康人	町田市立博物館	
14	親子体験学習会ー縄文土器作りー 【平成 4 年度の活動報告と平成 5 年度の活動計画】	秦哲子	日野市ふるさと博物館	1993 年
	(仮)郷土文化施設を建設中		(仮)国立市郷土文化施設開設準備室	
15	三博協と「郷土」博物館 博覧会の時代ー南多摩郡物産共進会をめぐるー 【平成 5 年度の活動報告と平成 6 年度の活動計画】	山岡博	調布市郷土博物館長	1994 年
	ふるさとたいけん館ー府中市郷土の森の体験学習ー 博物館映像に関するシンポジウムに参加して 【新たに取組検討の事業】 【博物館の連携の必要性】 【今までの展示 これからの展示】 【はじめてまして！博物館！！】	後藤廣史	府中市郷土の森	
	【特集】終戦 50 年と博物館事業 【加盟館（園）の話題】 【新加入館紹介 1】江戸東京たてももの園 【新加入館紹介 2】たましん歴史・美術館、御岳美術館 【三多摩公立博物館協議会の活動】（平成 7 年 4 月～12 月）	後藤祥夫	東大和市立郷土博物館	
16	東村山ふるさと歴史館が開館 常設展リニューアル 【加盟館（園）の話題】	東村山ふるさと歴史館	羽村市郷土博物館	1995 年
	【近隣博物館紹介】	加盟館	加盟館	
	おもろい博物館をめざしてーイギリス・アメリカにおける博物館の取り組みー	原真麻子	東京都教育庁生涯学習部文化課	
17	燻蒸剤・臭化メチルの使用規制と博物館・美術館等における防虫防黴対策の今後 【三多摩平成 9 年度第 1 回協議会協議事項報告】博物館及び資料の消毒・燻蒸についてのアンケート結果より	木川りか	東京国立文化財研究所	1996 年
	【加盟館（園）の話題】	加盟館		
18	「奥多摩 水とみどりのふれあい館」オープン 4 館合同企画「トラム（路面電車）とメトロ（地下鉄）」を開催してー地域博物館における展示会共催のこころみー 【加盟館（園）の話題】	奥原哲志	新宿歴史博物館	1997 年
	【三博協新加入】「パルテノン多摩歴史ミュージアム」リニューアルオープン 西暦 2000 年を迎え 三多摩公立博物館協議会の草創期を想う	加盟館		
	私的「ミュージアム多摩」創刊のこころ 【加盟館（園）の話題】	朝倉雅彦	元府中市立郷土館長	
19	燻蒸剤・臭化メチルの使用規制と博物館・美術館等における防虫防黴対策の今後 【三多摩平成 9 年度第 1 回協議会協議事項報告】博物館及び資料の消毒・燻蒸についてのアンケート結果より	佐藤広	八王子市教育委員会社会教育課	1998 年
	【加盟館（園）の話題】	加盟館		
20	「奥多摩 水とみどりのふれあい館」オープン 4 館合同企画「トラム（路面電車）とメトロ（地下鉄）」を開催してー地域博物館における展示会共催のこころみー 【加盟館（園）の話題】	朝倉雅彦	元府中市立郷土館長	1999 年
	【三博協新加入】「パルテノン多摩歴史ミュージアム」リニューアルオープン 西暦 2000 年を迎え 三多摩公立博物館協議会の草創期を想う	佐藤広	八王子市教育委員会社会教育課	
21	私的「ミュージアム多摩」創刊のこころ 【加盟館（園）の話題】	加盟館		2000 年

22	【特集】近・現代資料と博物館活動	加盟館		2001年
	【特別寄稿】チャンスを活かすー特別展・企画展の一側面ー	北村敏	大田区立郷土博物館	
23	【特別寄稿】企画展「戦後松戸の生活革新」における現代生活資料の展示表現	青木俊也	松戸市立博物館	2002年
	【特集】「総合的な学習の時間」への取り組み	加盟館		
24	縄文人がやって来た！「総合的な学習の時間」への一つの試み 学校と支えあう博物館をめざして～戸田市立郷土博物館を事例に～	片貝勝	戸田市立郷土博物館指導主事	2003年
	「多摩の博物館さんぽ」アンケート報告	三博協企画委員会		
	【加盟館（園）の話題】	加盟館		
25	【特集】市民の力ー博物館活動のひろがりー	加盟館		2004年
	博物館におけるボランティア活動に関わるアンケートー結果報告ー	三博協編集委員会		
26	【特集】『収蔵庫問題』の解決に向けて	加盟館		2005年
	日の出町における文化財を活用した学校支援ー平成14・15年度事例報告ー	佐伯秀人	日の出町教育委員会社会教育課文化財係	
27	【特集】博物館実習	加盟館		2006年
	博物館実習の課題と今後の方向性	粕谷崇	渋谷区教育委員会郷土博物館等開設準備（郷土資料室）	
	【平成16年度研修会報告】三博協・君津地方公立博物館協議会合同研修会 博物館と市民参加	金子淳	企画委員会研修会担当（パルテノン多摩歴史ミュージアム）	
	研修会に参加して	森克之	くにたち郷土文化館	
	国指定史跡見学会 中世城郭八王子城	菱山栄三郎	企画委員会研修会担当（福生市郷土資料室）	
	「中世城郭八王子城」見学会に参加して	柳澤剛	清瀬市郷土博物館	
28	ワークショップ 博物館の自己点検	峰岸未来	企画委員会研修担当（日野市ふるさと博物館）	2007年
	【平成16年度活動報告】			
	【特集1】指定管理者制度 学習会「博物館における指定管理者制度を考える」を開催して	金子淳	パルテノン多摩歴史ミュージアム	
	「博物館における指定管理者制度を考える」に参加して	深澤靖幸	府中市郷土の森博物館	
29	指定管理者制度導入に向けての現状報告	立川市歴史民俗資料館		2008年
	くにたち郷土文化館と指定管理者制度	くにたち郷土文化館		
28	【特集2】戦後60年 特別展「戦時下の市民生活」	加盟館		2007年
	【活動報告】			
	【平成17年度活動報告】			
	【特集①】常設展示室の挑戦			
	地域科学館における常設展示室のこれまでとこれから～教育普及活動を軸に広がる常設展示室の概念～	近藤由美子	多摩六都科学館	
	繊維博物館のリニューアル	田中鶴代	東京農工大学工学部附属繊維博物館	
29	すまいづくりまちづくりの技術を伝えて	大木真理子	集合住宅歴史館	2008年
	常設展示室展示替えの歩み	柳澤剛	清瀬市郷土博物館	
	【特集②】多摩川の自然と文化を考える			
	多摩川環境について	中村武史	府中市郷土の森博物館	
29	多摩川を描いた絵巻2題	小野一之	府中市郷土の森博物館	2008年
	【会員館活動報告】	加盟館		
	【新規入会館紹介】国立ハンセン病資料館のリニューアル	高野弘之	国立ハンセン病資料館	
29	【研修会報告】「多摩の博物館小史」体験メモ	佐藤広	八王子市総合政策部市史編纂室長	2008年
	図書館・博物館合同研修会 地域資料を活かす図書館・博物館ー地図資料を中心にー	金井安子	調布市郷土博物館	
29	【会員館活動報告】	加盟館		2008年

◆三博協 30 周年によせて◆

三博協の30年に想うこと

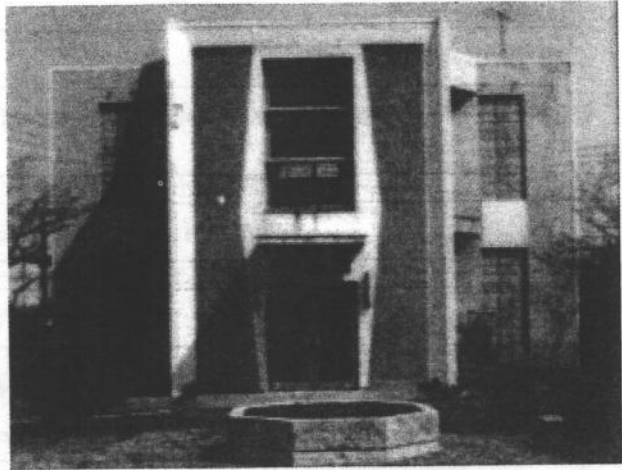
東村山ふるさと歴史館 増田泰重

もう 30 年たったのかと思うとやはりある種の感慨があります。わたしは三博協が発足した 1978 年に「東村山ふるさと歴史館」の前身「市立郷土館」に携わりましたので、その誕生に立ち会ったことになります。館長会から発展したためか、はじめは館長会的な色彩も残し、もっと現場職員の交流の場になってほしいとの感想を持ったことを記憶しています。

当初は 9 館であった会員も現在は 29 館とのことです。この間に博物館ブームといわれ生涯学習の時代ともいわれた時期があり、その一端を担うべく各市がこぞって施設建設を行いました。しかし、多摩地域という狭い範囲を対象とするなかで、同じ地域博物館として、それぞれの館ではその地域の特色をどう見出しどう表現するのか、多くの努力がされた時代でした。

市立郷土館は収蔵庫すら持たない小さな陳列施設でしたが、1965 年に開館し多摩地域における博物館的施設の先駆けといわれました。その郷土館もふるさと歴史館という大きな館になりましたが、原点は、地域の人々の「いま残さなければ、もう失われてしまう。」という地域の歴史資料への想いにあります。

いま、中央の博物館が徐々に集客装置化し、ともすればアミューズメントパークになりかねない現在、多摩という地域で、地域博物館を横につなぐ組織としての三博協が、もう一度地域博物館とは何なのかを考える場であってほしいと願っています。



写真：開館当時の市立郷土館 昭和 40 年

文化の点と線—三博協に期待をよせるもの—

調布市郷土博物館 関口宣明

庶民文化を考える上で、調布だけの範囲で扱ったのでは限界のあるものの一例に、道や川を媒介とした人や物の動きがあげられる。これらは、その事例、事例に即して、関連した地区の博物館などの諸機関が共同して調査研究にあたっていかなければ、実りは少ない。たとえば調布に伝承されている祭ばやしについて、流派の系統の流れや分布を推測するにも、また、多摩川流域の村々の草葺屋根が、会津の屋根職人によって葺かれた事例でも同じことがいえるのである。

今年は、深大寺の本尊白鳳仏が発見されて 100 周年を迎え、郷土博物館では『深大寺展』を企画していることから、深大寺を例にみてみよう。

市内には、深大寺への参詣道を知らせる石の道標が 3 基残されている。いずれも 1800 年前後のもので、深大寺と江戸方面、所沢、保谷（柳沢）、三鷹及び相州（神奈川）方面を結んでいる。これらは作善のため、地元の人々が旅人への案内として立てたものである。

明治生まれの古老の記憶によると、当時養蚕が盛んであった深大寺地区に、正月 3 日～20 日の間、数々の芸人が家々を訪れてきた。烏帽子に下駄履き姿で、万歳唄を唄い、おどけた踊りをする三河万歳、獅子舞、目が不自由で三味線弾きをする警女、馬の首形をつけて踊る

春駒などである。大沢（三鷹市）には、こうした旅芸人が泊まる宿があった。片桐讓氏の論考『石橋供養塔と警女』では、宝暦 9（1759）年の上保谷村（現西東京市内）に岩崎警女を頭とした一座が居住し、僧侶の主導のもと、村の有力者とともに周辺の村々を勧化し、駒止橋を完成させたことが報告されている。さらに、南に程近い柳沢には、「南深大寺道」と刻んだ六地藏塔があるので、旅芸人は古刹深大寺をよすがとし、この道を通って、調布を訪れたと思われる。

このように、深大寺は、古くから先祖供養の場として地元の農家との絆を深め、心の拠り所となり、飢饉に際しては、食物を調達できる救護所の役割を持った。また、縁日での生活物資の調達や、芸能や娯楽を庶民にもたらした場の一つでもあった。様々な文化において、点を線で結んでいくことにより豊かな地域像が見えてくる。伝承が失われていく多摩の歴史や文化の幅広い情報の収集が急がれるところであり、情報交換の場として、30 周年を迎えた「三博協」の存在は心強いものとなっている。

転換点だったかもしれないー三博協30年によせてー

府中市郷土の森博物館 小野一之

2000年5月19日、某郷土博物館で行われた三博協定期総会が終わり、駅まで歩いてもどる途中、今は大学に移ったK君は何やら憤慨しているようだった。総会は質問も意見も出ないまま、すばやく終了し、各人にケーキセットが出された。思いがけないものを口にでき、しかもこのまま早く帰れるのだから、ま、いいか、と思ったのは当方で、K君にしてみれば、所属のT市が三博協に加入したばかりで、最初からこれでは意味がないと思ったのだろう。早速、駅前のコージーコーナーに立ち寄り（今度はケーキを注文しなかったが）、今後の三博協について意見を述べ合ったように覚えている。大先輩格のH市のSさんも一緒だった。この記憶すべき2000年。この年、多摩地域を縦断する多摩モノレールが開通している。

翌年、三博協に企画委員会が立ち上がった。呼びかけに応じてくれた有志、7館13名がメンバーで、この時点ではまだ非公式のグループだったが、何かをしていくことになった。お金をかけず可能なところからということで、最初は「多摩の博物館さんぽ」パンフの発行、続いて「スタンプラリー」と年3回の研修会を始めた。こうした実績が認められ、2004年には、各館がメンバーを推薦するスタイルの企画委員会が三博協内の正式組

織として再スタートした。始まりの2001年。折しも日本博物館協会が「〈対話と連携〉の博物館ー市民とともに創る新時代博物館」というテーゼを発表した年である。

「スタンプラリー」参加者からの激しい苦情を受けたこともあった。原因は貧弱な景品にあったが、民間と比較した「博物館協議会の人々の投げ槍にも似たやり方」を痛打された。善意？と思った仕事も自己満足にしか受け取られない場合があることを思い知らされた。詫び状を書き、経緯は協議会で報告されたが、手紙はいまも大切に保管してある。これは2003年の出来事。この年、自治法改正により指定管理者制度導入が示され、博物館界の行く手の苦難が予告された。

この間にも、編集委員会の努力で『ミュージアム多摩』誌が充実化し、たましん地域文化財団の配慮で『多摩のあゆみ』博物館特集号が企画された。しかし、そうこうしているうちに齢を重ね、三博協の活動にいつまでもいて後任を妨げていることにも気付いた。実現できなかったことは多いが、かつて諸先輩がそうしてくれたように、一歩ひいたところで将来を楽しみにすることにした。

◆会員館活動報告◆

平成20年度活動報告

瑞穂町郷土資料館 高田賢治

瑞穂町郷土資料館では、平成20年度は①郷土の伝統工芸②町内の自然環境③第二次大戦後以降の日常生活文化についての教育・普及に重点をおいて活動いたしました。

①は、瑞穂町はかつて村山大島紬という絹織物の生産が盛んで、村の至る所で機織りの音が聞こえてきたものでした。村山大島紬は「板締め緋」という精緻な染色技術が特色ですが、現在は洋装の普及に伴う需要の減少のため、瑞穂町内では生産されていない状況です。こうした状況から、村山大島紬に関わってきた職人の方々も離職や高齢化が徐々に進み、無形文化財としての村山大島紬は技術消滅の危機に瀕しています。そこで資料館では、郷土伝統工芸の周知と技術の保存を目的に、子ども達を対象に機織りと染色体験を行いました。どちらも子ども達は夢中になって行っている姿が印象的でした。今後は後継者の育成が課題です。

②は、これまで瑞穂町では自然観察会等を中心に行ってきましたが、今年度は調査研究活動を軸に成果報告を実施しました。テーマは「ツバメの営巣状況」を選択

しました。調査の結果は「ツバメ営巣調査報告展」として展示報告し、併せて展示解説「ツバメ営巣調査と瑞穂の動植物」を行いました。ツバメは町内を流れる残堀川流域の住宅地に最も多く観察され、周囲に緑や畑のある水辺に多く見つかりました。この結果、瑞穂町内では人間の生活に適する環境とツバメの営巣に適する環境は共通点があることが明らかとなりました。今回の調査は、瑞穂町内の自然環境について考えるよい機会となりました。

③は、身近にある日常生活道具を「衣(着る)」「食」「住」に分類展示し、それらがどのように私たちの暮らしを支えてきたかを探りました。現在、科学技術の進歩により、私たちはその便利さを享受する中で、人は自ら行動し健康に暮らしていく力が弱くなりがちです。そこで道具の変遷から、先人が歩んできた着実な生活や工夫を知り、見学者の今後に生かしていけるよう努めました。

これらの事業については、来年度以降も力を入れていく予定です。

「皆さん！！檜原村郷土資料館へお越しく下さい」

檜原村郷土資料館 吉沢文夫

檜原村郷土資料館は、昭和 62 年度に建設され昭和 63 年 6 月より開館しており今年で 22 年目となりますが、近年の来館者の落ち込みはひどく開館当初 2 万人もあった来館者が現在は 4～5 千人という状況であり、当初と比較すると 80% 近く落ち込んでおります。

来館者の増員を図るため「何かしなければ！！」と思い「昆虫展・押し花展・野鳥写真展・正月の繭玉展」等を開催しましたが来館者数は一向に変わりませんでし

た。

よって 21 年度は来館者の増員を図るため、消防法で定める「優良防火対象物」の認定を取得すると共に、会議室をギャラリーとして無料開放し、更に今まで希望者に無料放映していたマルチビジョンによる「檜原の四季」、並びに DVD による「自然編・歴史編」に加え、ブルーレイ・ハイビジョンによる「檜原村歳時記」を作成し 6 月から希望者に放映すべく準備中です。

国立ハンセン病資料館 平成 20 年度活動報告

国立ハンセン病資料館 高野弘之

リニューアルから 2 年目となる今年度を振り返ると、企画展を 3 本開催するなど充実した活動を行うことができた。

当館の教育普及活動の中心は来館者に対する「語り部」活動（事前予約ある団体に対し実施）であることはリニューアル前から変わらず、今年度も平沢保治・佐川修氏（多磨全生園入園者）による語り部が 158 団体（21 年 2 月末現在）、成田稔館長による医学講義が 26 団体（同。医学・看護関係学生のみを対象）に対し行われた。

春季企画展は「ハンセン病療養所の現在」（4 / 26～6 / 29）とし、付帯事業として連続講演会「療養所の歴史を語る」（6 / 22・29）を行い、佐川修氏（栗生楽泉園）・平沢保治氏（多磨全生園）・藤崎陸安氏（松丘保養園）・神美知宏氏（大島青松園）の方々にお話をうかがうことができた。

同時期に持ち込み企画である 5 人の写真家による作品パネル展「ハンセン病を撮る」（5 / 7～20）を催した。秋季企画展は「ちぎられた心を抱いて ー 隔離の中で生きた子どもたち ー」（9 / 27～11 / 30）を開催し、11 月は 4,089 人の入館者を迎える大盛況であった。

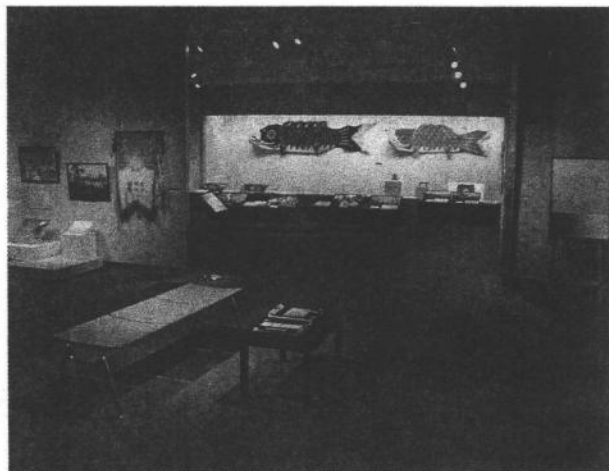
年が改まり企画展「北高作陶展ー仲間を支えられてー」（1 / 31～3 / 1）とギャラリー展「多磨全生園陶芸室のあゆみ」展（同）を同時開催し、好評を得た。

これらの展示はいずれも入所者の手元にあった日用品、文化活動を通じて生みだした作品などの資料によって支えられ、今年も数多くのハンセン病関係資料を収集できた。寄贈者の皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

駿河療養所入所者の加藤博子様からは絵画作品 43 点・手芸作品一式、遠山美恵子様からは岐阜県の私立病院でハンセン病治療を行っていた回天病院の関係資料を御寄贈いただいた。多磨全生園入園者自治会様からのハンセン病図書館旧蔵書 5,077 冊は、直接手にとってハンセン病に関する知見を深めていただけるよう閲覧室に排架し提供している。

出版物は各企画展図録、『資料館だより』第 59～62 号、『国立ハンセン病資料館年報 第 1 号 平成 19（2007）年度』、『国立ハンセン病資料館常設展示図録 2008』、『多磨全生園入所者自治会旧蔵書目録』（3 月刊行予定）を刊行した。

今年度は多磨全生園を含む 5 つの療養所が開設 100 周年をむかえ、4 月からは「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が施行される注目すべき年でもある。当館への「ハンセン病に関する啓発基地」としての期待は益々重くなるだろう。新たな課題も多かろうが、全力で立ち向かいたい。



「秋季企画展「ちぎられた心を抱いて」」

特別企画「根岸正展—清瀬・土地っ子の絵画遍歴」を開催

清瀬市郷土博物館 柳澤剛

平成20年5月31日(土)から6月15日(日)まで、特別企画「根岸正展—清瀬・土地っ子の絵画遍歴—」を開催しました。武蔵野美術大学名誉教授で当館の元館長でもあった根岸正氏は、清瀬で育ち、その風景などから感じ得たものをテーマとして、創作活動を続けてこられました。本特別企画展は作品を約60点展示し、氏の足跡をたどった回顧展として実施しました。

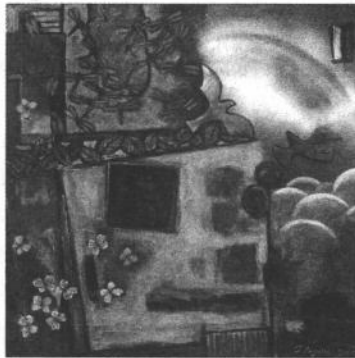
当館のギャラリーと講座室を会場として、ギャラリーでは、油彩画・アクリル画などの大きい作品を中心に展示しました。いわゆる清瀬の風景画のコーナー、地面をテーマにしたコーナー、半抽象画のコーナーなどに分け、それぞれのコーナーを見ていくことで氏の絵画遍歴をたどることができるように構成したものです。

講座室では、素描・リトグラフ・油彩画などの小品を中心に展示しました。また、根岸氏が執筆した書籍や表紙絵を提供した雑誌類、木版を使った年賀葉書なども紹介し、氏の広範な創作活動をご覧いただけたことと思います。

ギャラリートーク

展覧会の関連事業として、6月8日(日)と14日(土)にギャラリートークを開催しました。これは、展示会場内の根岸正氏自らによる主要作品の解説です。2日間

とも会場には50人を超す参加者がありましたが、作品を制作する際のエピソードなどに、熱心に耳を傾ける参加者の姿が印象的でした。長年大学で教鞭をとられていたこともあり、分かりやすい説明にご満足いただけたことと思います。



夏も終わりのハーモニーII



会場の様子

活動報告

奥多摩水と緑のふれあい館 堀口行雄

奥多摩水と緑のふれあい館は、旧奥多摩郷土資料館跡地に東京都水道局と奥多摩町が共同で建設し、平成20年11月で開館満10周年を迎えました。

満10周年に先立つ6月には開館以来250万人目のお客様をお迎えしました。観光地の中心ということや、周囲を豊かな自然に囲まれ、四季折々の変化が目の当たりに楽しめる場所でもあることから毎年多くの方にご来館いただいております。

また昨年11月には10周年記念コンサートと銘打ち、いつもの年より規模を拡大して実施し多くの方にご好評をいただきました。

今後も自然の博物館も併せ持った施設として奥多摩湖を訪れる多くの方々に楽しんでいただけるよう管理運営を心がけていきたいと思っています。

20年度の主な活動として次のイベントを実施しました。

- 4月・春のミニコンサート(2日間延べ4回公演)
内容: マリンバの演奏とソプラノ歌手の競演
- 7月・スタンプラリー(～10月)
- 9月・オープンアーティスト公演(午前午後の2回公演)
内容: パントマイム等

- 9月・水源地郷土芸能公演
内容: 小河内の郷土芸能(獅子舞3団体及び鹿島踊りの上演)
- 11月・開館10周年記念秋のコンサート(2日間延べ4回公演)
内容: ソプラノ歌手の上演と都民交響楽団の演奏



※21年度についても春・秋のミニコンサートを主に郷土芸能の公演等を予定しています。

上段: オープンアーティスト公演
下段: 水源地郷土芸能公演

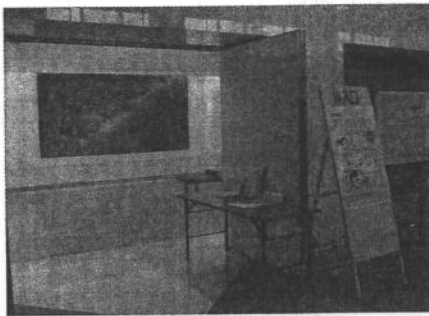


企画展示のウラ話

東大和市郷土博物館 木村敏

東大和市立郷土博物館にはプラネタリウム施設があり、一般のお客様へ星座や天文の話題を紹介する一般投影のほか、学校や、幼稚園・保育園の向けの投影も行っており、まさにフル活用とも言える状況です。

しかしお客様を見ていると、季節の星の変化や日々の月の動きなど、基本的な天文現象に対する理解が決して高いとは思えません。そこで平成20年の夏は、『宇宙おもしろ雑学』という企画展示を開催しました。難しいイメージのある天文学や宇宙のことを、より身近に感じてもらおうと企画したものです。

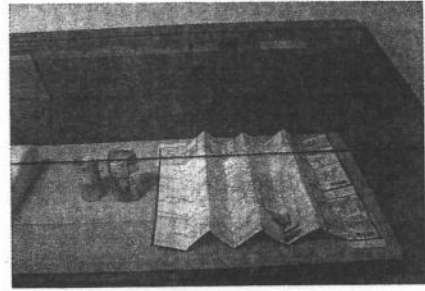


この企画展では、宇宙ロケットや人工衛星の技術を生生活用品に応用した、いわゆる「スピノフ」の資料を展示しまし

た。数は多くはありませんでしたが、その展示資料の入手には、ちょっとしたウラ話があります。

ひとつは「ダイヤモンド缶」と呼ばれる飲料用の缶で

す。太陽電池パネルに使われるミウラ折りという技術の応用で、金属板を薄くしながら強度を保ち、軽量化



を図っています。展示ではコーヒーとチューハイの缶を使いましたが、アルミ缶は内側からの圧力がないほうがダイヤモンドの様子がよくわかります。そこで担当者は自腹で缶を購入し、中身を空けた後に展示しました。

もうひとつは低反発ウレタンです。スペースシャトルのシートに使われ、発射の衝撃を吸収するこの素材は、マットレスや緩衝材として一般生活に定着しています。展示では枕を紹介しましたが、公費で購入できるお店が限られるうえ、予算との折り合いがつきませんでした。期限が迫る中、ついに最後の手段で安い製品を何とか入手しました。無事に展示が終了した現在、枕は私の頭を毎晩支えてくれています。そう、私が安売りの量販店で購入したものを、展示資料として提供したのです。

企画展「～よく見て大きくごしごしと～人間国宝三浦小平二展」

くにたち郷土文化館 立花由美子

陶芸家故三浦小平二氏は生前国立市在住で、陶芸界の中心的存在として活動を続け、青磁に色絵を施すという独自の世界を確立し、平成9年に青磁の分野で初の重要無形文化財技術保持者（人間国宝）に認定され、平成18年に惜しまれつつ73歳で亡くなりました。その後平成19年7月に小平二氏夫人三浦竹子様より国立市に小平二氏の作品29点が寄贈されました（平成20年8月に1点追加）。

くにたち郷土文化館では、平成15年度にも三浦小平二氏の企画展を開催していますが、今回は市に寄贈された作品と共に、佐渡で生まれた小平二氏が国立市にアトリエを構えて活躍されていた生涯をたどりました。そのため、美術展としては異例の試みとして国立市内にあるアトリエの再現と、

作家の青磁作品完成までの格闘の様子を来館者に解りやすくするため、残されていた失敗作品を展示しました。このアトリエ再現では、アトリ



アトリエ再現・失敗作品展示ゾーン

エから見える風景を壁面に貼り空間を演出しました。そして青磁制作に実際に使用したろくろや作陶道具類、制作途中の素焼きの作品、釉薬がかけられ、これから窯で焼かれるのを待つ花瓶や香炉などをお借りして展示しました。また、粘土は観覧者に作品をより深く理解してもらえることを考え、手で触れるように設置しました。

失敗作品展示は、青磁は100個作っても1個完成するかどうかというほど完成品ができるまでのリスクが高く、そういった作家の格闘を観覧者に視覚的に感じてもらうという主旨で設置しました。アンケートでは、「青磁ができるまでの苦勞がよくわかった」「身近な国立市に人間国宝の陶芸家がいたことに驚いた」などの意見が寄せられました。

今回は5年ぶりの有料展示となり、入館者が気になるところでしたが、2,327人（有料者1,827人）という大勢の観覧者が来館されました。指定管理者として、収益を考慮に入れた展示作りという課題について考え、歩み始めたくにたち郷土文化館の一年でもありました。



展示室内の様子

通年体験学習事業に思う

立川市歴史民俗資料館 小川始

平成20年度の活動報告として、当館の附属施設「古民家園（立川市幸町）」で実施されている通年体験学習事業について書かせていただこうと思います。実はこのテーマは第28号でも報告させていただいており、今回で2回目となります。ただ、前回報告しているのは私の前任者だったので、今年度新たに担当となった私の視点から報告したいと思います。

通年体験学習事業は、「…建物を見ただけでは分からない農家の暮らしを理解していただくため、農作業や年中行事などを一年間を通して実際に体験する「体験型」学習事業として開設され…(中略)…種まきから始まって夏の暑い時期の草取りや堆肥作りなどの一連の農作業を経て収穫につなげ、農作業の大変さや収穫の喜びを肌で知っていただくこと…(第28号から)」をコンセプトにしています。

古民家園では以前からも園内の畑を使って体験学習を実施しておりました。しかし、麦刈りなら麦刈り、芋掘りなら芋掘りと単発の事業で、一連の農作業を体験するものではありませんでした。そこで平成16年度から前段で説明したコンセプトをもって通年型の体験学習事業となったものです。

今年度は第4期目の募集で、30名の定員に対して

35名の応募がありました。親子での応募が比較的多かったことは何よりでした。第1回目は、7月20日(日)からスタートし、その後、陸稲収穫・脱穀・麦まき・麦踏などの農作業と、手打ちうどん、餅つき・正月飾り・繭玉飾り・七草がゆなどの年中行事や食体験事業を合計で11回実施しました。なお、第4期の方は、平成21年度も麦刈りや脱穀、さつま芋の植え付けや収穫など、10月まで継続して参加いただく予定です。

農作業の指導は地元の農家の方にお願ひし、年中行事や食体験の講師は市内の団体などに依頼しています。通年型体験学習の良いところは、再三書いていますが一連の農作業を通して体験できるとことにあり、特に、私たちが普段口にしていない食べ物がどのように生産されているのか学習する良い機会となり、それが食育にもつながってゆくことです。

一方で課題もあります。毎回熱心に参加して下さる方もいるのですが、草むしりなどの地味?な作業の時はどうしても参加者が少なくなります。できるだけ多くの方に参加していただく工夫が必要です。

何はともあれ今年の10月、参加者の方からどんな感想が聞かれるか楽しみです。

写真展の開催について…「モダン福生 写真展—昭和20～63年—」

福生市郷土資料室 秋山喜久江

写真には、一目でわかるいろいろな情報が含まれています。それは、時間や場所の記録であり、また、郷愁や美しさを感じられるものではないでしょうか。そんなわかりやすさが、多くのかたに愛されるのでしょうか、平成9年に「福生百年」として、主に明治大正期の写真展を開催した際には、多くの方が来館したとのことでした。そこで、今回はその続編として戦後の昭和期の写真展を開催することになりました。この時期、福生市は、農業地域から都市へと新しい街づくりに歩みだし、人口の増加とそれに伴う学校や道路の整備、大規模な区画整理等が行なわれています。多くの農地が、市街地へと変わっていった時代でした。また、市の東北部に位置した「陸軍多摩飛行場」が、戦後「米軍横田基地」へと変わっています。そんな変革の時代を写真で綴ることとしました。当市では、以前から写真収集をしていましたが、この展示にあたり、市民からの写真提供の協力を募集し、多くの方の協力を得ました。

写真提供者の一人に、昭和32年に来日し、現在でも福生在住の方で、30・40年代の市内の多くの写真を撮った方がいらっしゃいました。その提供写真は、カラーで当時の市内の様子を鮮やかに伝えるもので、この写真展の中心となるものになりました。その他の方々からも子

どもたちの何気ない遊びの風景など貴重な写真の提供をうけています。また、広報担当課から、昭和40年代からの広報写真を譲り受け、充実した写真展を開催することができました。

来場者は、夫婦、親子、友人など連れだつての方々が多くいらっしゃり、話も弾み活気のある郷土資料室の光景を見ることができました。

今後も写真を収集するとともに、記録写真としてばかりでなく、写真資料自体の美しさや存在感などの価値を高めて、福生を多くの方に伝えていきたいと思っています。



上段：福生市北田園
(昭和36年)

下段：福生珠算学校前
(昭和52年)



平成20年度事業と今後

武蔵村山市立歴史民俗資料館 高橋建樹

平成20年度資料館事業の特徴は、「武蔵村山の戦争遺跡」をテーマに特別展・文化財見学会・歴史講座・体験教室を体系的に実施したことです。

旧跡指定された「東京陸軍少年飛行兵学校跡地」の紹介も目的の一つですが、近隣にあった所沢陸軍航空整備学校立川教育隊（高射砲部隊東部七八部隊駐屯地でもあった）や村山陸軍病院、三ツ木地区を中心に丘陵裾に広がる防空壕群や神明地区の丘陵上に設置された探照灯跡、そして2度にわたる空爆被害を受けた三ツ木峰地区などを含めると、戦争遺跡は市内全域に点在します。このことを知っていただきたいとの願いからの事業計画でした。

特別展は10月25日～12月7日の期間、上記した市内の戦争遺跡を網羅する形で展示。戦争体験者から、当時の様子などの聞き取りができました。

文化財見学会は10月25日（土）、榎崎由美氏を講師として「所沢陸軍航空整備学校立川教育隊跡地」「東京陸軍少年飛行兵学校跡地」などを見学しました。

歴史講座は11月15日（土）、榎崎茂彌氏を講師に迎え、立川地域の軍事関連施設を中心に当時の写真や航空写真、米軍資料、DVDなどの映像資料に加え、現地の現在の様子などを交えて講義を受けました。

体験教室は12月13日（土）、池谷タカ氏の指導の下、戦時中と現代のすいとんを作って試食しました。

このように一つのテーマに沿っていくつかの事業を実施することは、聞き取りを含めた資料収集やその整理においても体系的及び合理的に取り組むことが出来、職員数の少ない当資料館では画期的な事例であると同時に、今後の事業展開において少なからず影響を与えられます



特別展「武蔵村山の戦争遺跡」風景

「東京都埋蔵文化財センターの活動について」

東京都埋蔵文化財センター 竹尾進

東京都埋蔵文化財センターでは「多摩の遺跡と遺物」のテーマで通史展示を行い、併せて企画展示を行っています。毎年、周辺地域の小学校約100校が歴史または総合学習の授業で、多摩ニュータウン地域内の964遺跡から出土した縄文土器や石器を中心に見学することなどから、縄文時代の展示を中心に行っています。平成21年度の企画展示も引き続き縄文時代をテーマに「多摩丘陵の縄文集落」と設定しました。

小学校の見学は、通常展示室・体験コーナー・遺跡庭園の3コースに分けて見学をします。特に児童に人気があるのは、体験コーナーです。縄文土器の立体パズル、火おこし体験、ドングリをすり潰してみる体験など当時の縄文生活に触れ、体感してもらえればと思い、コーナーを拡充してきました。

最近では、見学できなかった学校や実際に体験してみたい学校からの要望で、出前授業を始めてみました。現在は「火おこし体験」が主体ですが、「勾玉作り」体験を希望する学校もあります。出前授業を希望する学校数が増えてきていますが、今後もより充実させていきたいと思えます。

今年度の行事としては、好評の縄文土器作りをはじめ、平成18年度から始めた木の実を磨り潰した縄文クッ

キー作りや縄文鍋を実際に料理する縄文食体験教室、遺跡庭園内にカマドを参加者に作ってもらい、古代米を試食する古代食体験教室を開催する予定です。また、勾玉か珠状耳飾のいずれかを作る人気のアクセサリ作り教室も9回行います。新規事業は、「石の斧で木を切ろう」です。磨製石斧は木を切りますと展示解説をするだけで、今まで実演すらもしたことがありませんでしたが、今回は首都大学東京との共同事業で実際に木を切る体験をしていただくことにしました。



20年度活動報告

集合住宅歴史館 木元理恵子

集合住宅歴史館は、UR都市機構 都市住宅技術研究所内にある施設の1つで、日本住宅公団時代に建設された団地の一部や、同潤会代官山アパートといった、歴史的に価値の高い集合住宅を移築・復元しています。

一般公開

集合住宅歴史館が設置されている(独)都市再生機構都市住宅技術研究所は、住宅に関する様々な技術開発や実験・研究の成果を専門家だけでなく一般の方にも公開するため、毎週火、水、木及び第2、4金曜日に研究施設の一般公開を行っています。研究所には、敷地内に研究と実験のための施設が10施設、さらに展示・体験のための公開施設が6施設あります。一般公開は事前予約制となっていますが、海外からの来場者も含め多くの方にご来場いただいております。平成20年度は、2523人(平成21年2月末時点)の来場者があり、海外からは21ヶ国、210人が訪れています。

特別公開

研究所では、毎年5月に予約無しでご見学いただける特別公開を行い、施設の公開とあわせて特別イベント等を開催しています。平成20年度は、5月23日(金)、24日(土)の2日間、「エコライフ」をテーマに、6箇所の一般公開施設に加えて振動実験棟、風洞実験棟等の

公開や、小・中・大学生限定の参加型イベントなどを行いました。



特別公開 イベント風景

来場者数は2日間で956人と、こちらも多くの方にご来場いただきました。今年も、5月に特別公開を開催する予定です。



また、特別公開の開催にあわせ、同潤会清砂通りアパートメントに関する展示を新たに加えました。

清砂通りアパートメント外壁
レリーフ

常設展示のリニューアル

八王子市郷土資料館 戸井晴夫

本館は1967年(昭和42)4月に開館しており、今年で42年目を迎えます。その間、節目ごとにたびたび常設展示のリニューアルを実施してきました。

常設展示とは、その名の通り、いつ来館しても常に同様のものが展示されているということで、来館者もそのように理解している方が多いようです。つまり、来館すればいつも目的の資料を見ることができるといことになります。このように、常設展示は館を代表するいわば顔となるものです。そのため、安易に展示替えを行うことができない反面、頻繁に来館される方々の中には、「いつ来ても代わり映えのしない展示」という印象をもたれる場合もあります。

本館の常設展示は、「八王子の歴史と文化」と題し、1987年(昭和62)開館20周年を記念して実施したものが基礎となっており、その後の1997年(平成9)の開館30周年を経ても大きく変更はしていませんでした。その理由の一つに同名の展示ガイドの発刊があります。一度在庫がなくなった1995年(平成7)に再販したものが現在も残っており、この展示ガイドに掲載されている展示資料の内容を大きく変えることはできません。

本館は「八王子の二十世紀」と題した特別展を機に2001年(平成13)に展示替えをし、2階の展示場を「八

王子の歴史と文化」、1階の展示場を「こどもれきし展示室」として公開してきました。しかし、近年顕著化してきている来館者の高齢化、社会科見学(市内の小学校3学年)の増加、体験コーナーの充実、新資料の増加等をふまえ、1階と2階の展示の入れ替えを2008年(平成20)12月に行いました。これにより、エレベーターのない本館でも階段を上らずに1階の通史の展示を見ることができるようになり、2階の広いスペースに小学生を集めることができました。

新博物館建設の計画もある中、実現にはまだ相当な期間を要することから、老朽化著しい本館の積極的な細部のリニューアルが今後も必要になりそうです。



開館15周年にあたって

多摩六都科学館 小菊 蕨

多摩六都科学館は、3月1日(日)に開館15周年を迎えました。当日は、紅白のアーチを通過してご来館されたお客様をあたたかい拍手でお迎えし、その後エントランスホールにお集まりいただいたご来館者、関係者が見守る中、高柳雄一館長と子どもたちが力を合わせて勢いよくくす玉を割り、『祝 多摩六都科学館 開館15周年』の垂れ幕が登場すると、大きな歓声と拍手、笑顔に包まれたセレモニーが始まりました。館内では記念グッズの配布(3月中の14日間配布)や開館15周年記念事業を行い、大変賑やかな一日となりました。

開館15周年記念式典では、ご来賓よりお祝いの言葉と共に、開館15周年を迎えた多摩六都科学館が生涯を通じた学習の重要性が高まる社会において果たす役割は非常に大きく、市民をはじめとする多くの皆様に末永く愛される科学館となるようにとの希望が込められたメッセージをいただきました。続く表彰式では、教育普及活動への事業協力やご寄附をいただいた方への表彰や功労表彰を行い、『ロクト未来博士号取得講座』(協力:早稲田大学)に参加した子どもたちには認定証が授与されました。

当館で科学の不思議に触れたことを契機に科学好きが増え、輝かしい将来の科学技術を担う子どもたちが科学

する心や科学の芽を育み、科学を身近に感じる機会を提供する場となりますように今後も活動して参ります。引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

開館15周年記念事業

- ① シンポジウム(3月8日)
「ほら、そこに不思議が～宇宙の学校から～」
- ② タイムカプセル事業(3月1日から29日)
「天体望遠鏡工作ワークショップ」
- ③ つくば1日施設見学会(3月25日)
「日本の科学の研究・開発の現場に触れてみよう」



開館15周年記念セレモニー

多摩地域の戦時下資料研究会の活動

たましん地域文化財団 保坂一房

当財団では2003年度から「多摩地域の戦時下資料研究会」を立ち上げて活動しています。満洲事変～日中戦争～太平洋戦争～GHQ占領と続く戦時下、多摩地域はどのような変貌を遂げていくのか。各種資料を調査・収集・整理するなかで、その実相を明らかにすることを目的としています。多摩各地で活動している方々にふた月に1回ほど集まっていたいただき、報告や意見交換などを行っています。その成果は『多摩のあゆみ』第119号(05年8月発行)で特集「戦時下の地域社会」を組んで、7本のご論考となりました。さらに第129号(08年2月発行)には、榎崎茂彌氏が調査の過程で発見された米軍史料「Tactical Mission Report」(作戦任務報告書)を分析し、B29空襲の状況を追究しています。

通称「戦時研」では空襲の実態とともに、背景となる当時の地域社会の様子を解明するため、基本的な資料の収集を進めています。なかでも最近利用できるようになった米軍撮影の空中写真は、重要な資料です。(財)日本地図センターが米国国立公文書館所蔵の米軍撮影空中写真の調査をおこない、日本全国に及ぶ整備事業を進めています(『地図中心』被爆60年増刊号2005年、同センターHP)。このうち多摩地域に該当する90点を3年計画で収集中です。この空中写真は1944～45

年にかけて撮影されたものですが、同センターでは昭和10年代に日本陸軍が撮影した空中写真と、戦後の1947～48年に米軍が撮影した空中写真も提供していて、こちらでも500余点を収集しました。

空中写真に盛り込まれた情報を、読み解く際に有効なのが地図です。陸地測量部と都市計画東京地方委員会によって作成された1/3000地形図162図葉を収録した『多摩地形図』が、2004年に発行されました(発行・之潮)。空中写真と多摩地形図、その他の地図などを重ねてみると、土地利用の移り変わりが浮かび上がってきます。これらを視覚的に捉えるために、Google Earthを用いることにしました。戦時研では軍事基地や軍需工場に関するデータベースも作成していますので、こちらの文字情報もGoogle Earthの地図上に取り込みました。この結果、今まで所在地が不明だった施設が多摩地形図で確認できて、現在の場所も判明しました。現在、作業は進行中ですが、Google Earthは多様な機能を備えているようなので、公開の仕方なども検討したいと思っています。

企画展『文字でたどる江戸の旅』開催

青梅市郷土博物館 浜中茂

青梅市郷土博物館では、平成21年2月21日から企画展『文字でたどる江戸の旅』を開催しています。

江戸時代の後期には、経済が発展し、人々の生活にゆとりが生まれるようになりました。それにつれて、伊勢神宮を初めとして西国三十三か所、四国八十八か所、善光寺などへの民間信仰が盛んになり、これらの神社や寺院を参詣したり、各地の名所、旧跡を旅することが人々の人生の目標のひとつになりました。

そして、貨幣経済を担う商人の力が非常に大きくなった江戸時代末には、旅に物見遊山といった要素がさらに強まります。信仰の旅から遊興、娯楽の旅へと目的が広がっていくとともに商人はもとより職人や農民の間でもそれぞれの階層や背景に沿った形で旅が益々広く普及していきました。

また、そのことが全国各地の町や村に物資の流通、交通の整備、文化の交流、情報の伝播などのさまざまな効果を波及させていき、ひいては青梅の歴史や文化にも多大な影響を与えました。

本展は、展示タイトルにもあるように、一般的な農民である久保仙助と富裕な商家の夫人である小林たみの道中日記を中心に江戸時代の旅と、小嶋小三郎の道中日記から明治に青梅鉄道が開通して間もないころの、鉄道を

利用した旅の様子を文字でたどる形で紹介しています。

道中日記という日頃はあまりなじみのない近世の文書ですが、本展では、それぞれの旅の目的などの違いを日記から読み比べていただくことを目的としています。

そのため、資料については、読み下し文と現代語訳を付けて、文書に接するのが始めてだという見学者の方々にも親しみやすい内容にするよう心がけました。



上段：講座風景

下段：展示室の様子

また、3月8日には1階展示室内において、文書の解読に当たられた本市文化財保護審議会委員を講師にお願いして展示解説講座を実施し、大盛況のうちに終了しました。



里山活動・・・その後

羽村市郷土博物館 宮沢賢臣

『ミュージアム多摩』No.28において「里山文化の再生と保存にむけて」というタイトルで、羽村市郷土博物館裏の雑木林を「里山」に再生していく取り組みについて報告させていただきました。今回はその続編です。

昨年4月に市民ボランティアを募集し、10名のメンバーにより活動を開始しました。会の名称を「まる山里やまの会」とし、毎月第3土曜日を定例活動日としています。これまでにベースキャンプとなるテントや倉庫の整備、下草刈り、落ち葉掃き、樹木の伐採を行い、日野市倉沢の里山管理作業の作業体験や羽村での里山作業経験者からのお話も伺いました。機関誌も第2号まで発行し、いよいよ軌道に乗ってきた感じがします。

会員の中にはまったくの初心者から他の里山保全作業の経験者、造園を職業としている方まで、多彩な顔ぶれがそろいました。職員もまったくの未経験者で、試行錯誤の連続です。それでも毎回集合時間のはるか前に集まり、自発的に作業を開始してしま



落ち葉掃き



伐採・萌芽更新作業

います。

冬の作業の後には、豚汁や煮込みうどんを焚き火で作りました。車座になって熱いお汁をすすりながらの歓談は、会員の親睦を深めるには十分でした。

通常の活動に必要な鎌、枝切鋏、のこぎり、砥石等は基本的

に一人ひとつずつ貸与しています。これは、それぞれの道具に責任をもって管理して、自分が使いやすい＝怪我をしにくい状態を保ってもらうためです。炊き出しに使うなべや食材は、各自の持ち寄りや会費の一部で賄いました。

一方で、来年度に向けての課題も明らかになっています。一番大きな問題は、落ち葉や伐採樹木の活用です。かつての里山ではそれらは生活・生業の中で消費されてきましたが、今ではなかなか難しいことです。

これまで郷土博物館で実施してきた自然観察会や、体験学習会のプログラムともうまくリンクさせながら、多くの方に里山に関わっていただけるような活動を続けていきたいと考えています。

写真展『変わりゆく小金井一昭和から平成へ』

小金井市文化財センター 多田哲

昨年10月、市制50周年を迎えた小金井市は駅前再開発に伴い、大きく変貌しつつあります。そこで当館では、この機会に村から町、そして市へと目まぐるしく発展した昭和時代を振り返る写真展を11月1日から今年の2月22日まで開催しました。

今回の写真展では市史に残る催しや式典の写真ではなく、ありふれた日常の街並の写真を、同地点の平成の現況写真と対比して展示しました。時代は、舗装された道路やコンクリートの建物が急増する直前の昭和30年前後の風景を重点的に選定しました。小金井、そして日本全国の風景を根底から覆してしまった高度成長期を再考することこそ、今回の展示の隠されたテーマであり、敢えて日常、目にする風景を選んだのは、見る人誰もが主人公になれるからです。往時を知る高齢者は思い出が蘇り、過去を知らない若年層や移転されてきた方には、小金井の風土を伺い知る一助となり、「ここは昔、どんなだったのか？」という素朴な疑問が、歴史に親しむ第一歩になって欲しいとの狙いがあったからです。幸い高年層・若年層だけでなく、働き盛りの年齢層の来館者にも熱心な関心を持たれる方があったのは、うれしい誤算でした。

写真自体が特別なハレの日に整列して撮影するのが当たり前であった当時、今日のスナップ写真に相当する何

気ない日常の景色を捉えた画像は、残念ながら極めて少ないのが現状です。当館で以前から所蔵する画像データ約1,400件と最近、市の広報秘書課から移管された画像データ約3万件の中から、ふるいにかけて選択しましたが、第一段階である撮影地点の特定が最も難関となりました。データ中にはその大半が「市道〇号線」といった大まかな記載しかなく、それが通称〇〇通りと判っても、〇〇通りのどこで、どの方向に向かって撮影されているのかは、風景中に現在と共通するものが無い場合、特定が困難です。まず、画像をディスプレイで拡大して見ながら、道路の形状、目印となる建物や樹木・看板を探し出し、昭和30年代の地図・商店街図を参考に、漸く100点余りを特定できました。広報秘書課データの中には、当館所蔵データと全く同じ地点から撮影された異なる年代の画像もあり、新たな発見も少なくありませんでした。また、なるべく市内全域をカバーするように心がけたつもりですが、めぼしい画像が見当たらない地区もあり、今後の発見に期待をかけています。

更には今回の画像データを基に、CD-ROMによる写真集を作成しています。小金井市の地図上に撮影地点・方向を示す矢印形のアイコンを配置して、クリックするとその地点の昭和の画像がポップアップするしくみで、これまでにない新たな試みとして現在進行中です。



上段：武蔵小金井駅北口商店街 昭和40年
軒を連ねる個人商店はマンションに姿を変え、現在と共通する建物はありません。
下段：現在の風景



市民のチカラ、ますます大きく～パルテノン多摩博物館ボランティア

パルテノン多摩歴史ミュージアム 清水裕介

当館では、これまで開館準備期から活動を開始した「植物標本整理ボランティア」や、「古文書解読ボランティア」が活動してきた。一昨年には20周年を機会に「定点撮影プロジェクト」と「石仏調査団」が発足し、昨年12月には「民俗調査団」も活動を開始するなど、近年、市民のチカラは一層、かけがえのないものになっている。

昨年度開始された植物標本庫の一般公開や、近々予定されている「富澤日記」（国文学研究資料館所蔵）の刊行もその賜物である。これら当館の博物館ボランティアの活動のうち、今回は「定点撮影プロジェクト」を紹介したい。

現在、活動を行っているのは15名。ニュータウン開発前後の景観が記録された写真の撮影地点を特定し、撮影に行くのが主な活動である。メンバーはニュータウン開発以後に住民となった方々なため、当初は大規模造成の結果、跡形もなくなった景観の写真を前に「無理だ」との声もあがった。メンバーはもとより、担当も館に来て5ヶ月目のことで、「ゼロからのスタート」とも感じたものだった。

担当の頼りなさが功を奏したか、現在では、メンバー

は各々が自分のスタイルを確立しつつある。①ご本人が昔に撮った写真を素材に②オリジナルの高圧線鉄塔マップを作り、鉄塔から撮影地点を特定③地域の方に聞き取りを行う④古い写真を持った方を探して本人から聞き取りを行うなど。元々は「撮影者」としての募集だったものの、現在は収集・整理にも大きな役割を果たしている。

近年、多摩ニュータウンでは、開発を担った公的な団体の改組などが進められ、そこで作成された資料の寄贈が増えている。こうした受入資料の写真類も、同プロジェクトで整理を進めているところである。

館としては、収蔵写真の整理に努め、昨年には飯能市郷土館（埼玉県）の同プロジェクトと交流会を行い、成果発表として企画展や出張展などを行った。また、本年2月には東京都水道局の協力を得て、配水塔などからの撮影会を催した。

担当としては、プロジェクトのメンバーだけでなく、写真の提供や聞き取り調査などで地域の方にお世話になる度に、そのチカラと20年余の間に生まれた「つきあい」の存在の大きさを感じ、決して「ゼロ」からではなかったと感謝に堪えない日々である。



昭和45年撮影



平成21年撮影

茅葺き民家と昔くらし体験

江戸東京たてももの園 高橋英久

現在、多くの博物館で、小・中学校を対象とした教育プログラムの実践がなされ、その事例が報告されています。各館で創意工夫を凝らし学習指導要領に沿ったプログラムが開発されています。

江戸東京たてももの園においても、例年、近隣を主とし、特に小学3年時の社会科の学習単元である昔の暮らしに関連して、かつての生活様式を学ぶ学校が来園します。当園では野外建築博物館という特徴を活かし、茅葺き民家内での石臼、火鉢の火起こしなどを実際の生活空間において体験します。そこには暗さや寒さ、暖かさ、薪のはぜる音やにおい、米がすりつぶされる音や力の加減など暮らしを体感的に捉える要素が多分に含まれていると思われる。また、本事業に欠かせないのが、ボランティアの存在です。世代を超えた人との触れ合いのなかで、実際の話聞きながら、時に厳しく、時に和やかに活動を進めています。

歴史的建造物に触れ、かつ世代を超えた人との触れ合いを通しての学習ということで多くの学校から好評を得ています。

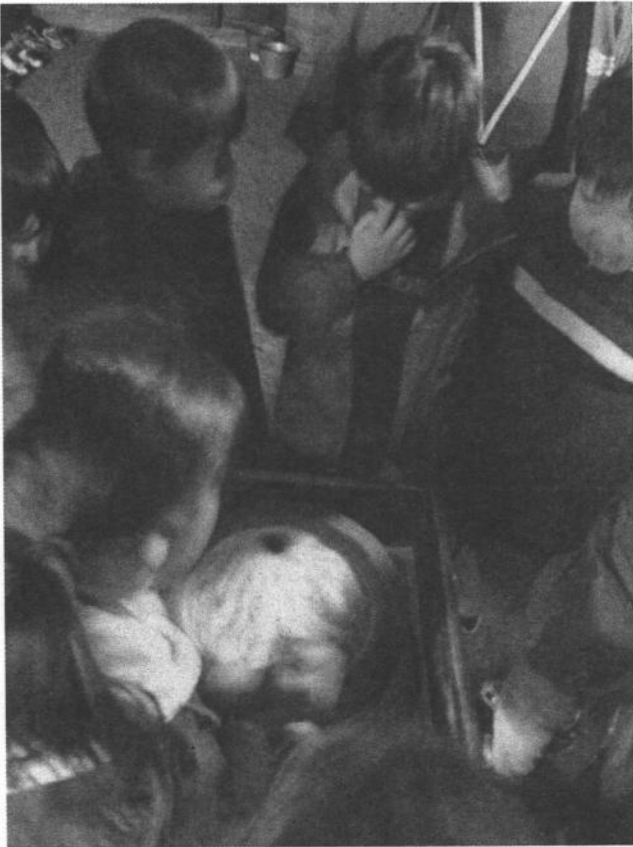
ここでは、その活動事例を紹介します。児童たちは担当職員から注意事項（①建物を大切にする ②元気にあいさつをする ③靴を揃える ④敷居を踏まない）を受

け、活動を開始します。

まず目にするのは現代の家とは明らかに違う茅葺きの民家。その中に入ると囲炉裏で焚かれている煙のにおいに驚きます。囲炉裏を囲み座って、座る位置に決まりがあったことや、囲炉裏廻りの道具の名前などの説明を聞きます。その後、囲炉裏から火種を取り、別の部屋の火鉢に持っていき息を吹きかけながら、炭をおこします。あらかた火が起ると手をかざし暖かさを体感し、手遊びなどをして、火消し壺を使って片づけをします。

土間では石臼をまわし、お米を粉にします。結構な重量がある石臼を力を込めてゆっくりと回していきます。下臼と上臼の間から出てくる粉をふるいにかけて、上新粉と欠け米に分け、細かな粉に触れその変わり様にびっくり。苦勞が形になる瞬間です。

どの学校も基本的には同じ内容のプログラムを行っていますが、児童によってその捉え方がまちまちな感は否めません。そのフォローの役割を担うのは学校なのか、博物館なのか、明確な線引きは曖昧なままであることが実状です。しかしながら、学校の学習に対して、補完的役割だけではない博物館の存在意義を考えることが目下の課題です。



石臼体験



民家内での体験

「ふるさと日野」を届ける～デリバリー博物館事業～

日野市郷土資料館 峰岸未来

日野市郷土資料館は、資料館のサービスを市内どこにでも提供できることを目標に、「デリバリー博物館事業」と称する出張展示や体験学習などへの人材派遣といった館外活動に力を入れています。会場側の施設や団体の希望や条件を踏まえて内容を検討するのです。

人材派遣の場合は、当館職員だけでなく、日頃から資料館活動に参加しているボランティアの方も含めて人選します。今年度は、正月飾りづくりや昔のおもちゃづくりの指導などを実施しました。

展示の場合は、館主催展示もあれば、パネルや展示物品の貸出しといった方法での支援も行います。高幡不動尊を会場とした「ほどくぼ小僧・勝五郎生まれ変わり物語」のパネル展示は、当館と高幡山金剛寺との共催です。七生村・日野町合併50年や多摩動物公園50年関連などのイベントへは市役所の担当課へ写真パネルを貸し出しました。民具など実物資料の活用は、展示よりは小学校への出張授業が中心で、毎年何校か実施してきました。

今年度はより積極的に展示や体験学習の支援を行うために、デリバリー博物館事業の案内を市内の高齢者施設

と児童施設に対して送付しました。その結果、介護老人保健施設や福祉センターから要望があり、あんかや火鉢などの民具を短期間展示し、展示にあわせた“お話し会”を実施しました。過去の経験を思い出し語ることは、高齢者がより充実した日常生活を送るために効果があるとされ、「回想法」という手法が医療・介護の分野で注目されています。当館の活動は「回想法」まで踏み込んだものではありませんが、民俗資料が高齢者のために活かされる場となりました。高齢者が利用する施設といっても、施設の性格も幅広く、同じ施設内でも入所者・通所者は健康状態が様々です。さらに、今までの当館活動を振り返っても、経験不足の分野ですから、より一層慎重に、安全配慮・内容・興味を引き出す説明方法など、施設職員と十分に打合せをする必要があります。

当館の「ふるさと日野」を届ける活動は、要望にお答えして実施しているので、これからもより多様なリクエストが届くことでしょう。試行錯誤を重ねながら「ふるさと」をしょって出かけていきたいと思えます。

東京農工大学科学博物館のリニューアルオープンに向けて

東京農工大科学博物館 松島朝英・中澤靖元

明治維新当時、生糸は最も重要な輸出品であり、政府は殖産興業と外貨獲得のため蚕糸業育成の政策を推進しました。このような背景のもと、明治19年(1886年)農商務省(現在の農水省と経済産業省)の蚕業試験場に設置された「参考品陳列場」が科学博物館の始まりです。

今年度より、工学府附属繊維博物館から東京農工大学科学博物館へと、全学化した大学博物館として名称が変更されました。そのため今年度は、これまで以上に博物館活動が積極的に行える施設としてのリニューアル整備(写真:展示室準備中1,2)を主に、来年度から本格的な大学博物館としての使命を全うできるよう、今後の事業計画を検討してきました。

1. 展示活動・研究活動の活性化

本館は、大学附属の科学博物館として活動を開始するにあたり、日本近代産業遺産や伝統工芸技術の保存・継承における使命・責任を再認識しました。従って、繊維博物館として今日までに至った過程を尊重しながら、上記の使命・責任を果たせる能力を有する機関を目指すと共に、農学・工学と研究分野に特化した東京農工大学の博物館として、本学の過去から現在に至る学術資料の公開展示を積極的に行います。また、日本の経済地盤の一翼を担った繊維産業分野の展示・解説に今後とも注力し、更なる第二次産業の発展に向けた、繊維産業分野の自己検証に繋がる研究活動を行います。

2. 情報発信

これまで収集してきた繊維関連資料を中心とし、多角的な視点から科学全般の常設展示を目指します。さらに、博物館活動の一環として、本学の教育・研究活動をわかりやすく紹介する大学最新研究紹介スペースを新たに設置する予定です。

以上の項目を平成21年度からスタートする計画です。特に、1. 展示活動・研究活動の活性化については、来館者の皆様、また博物館関係者の皆様のご意見ご叱責を頂きながら、東京農工大学にとって、また地域の皆様にとって、これまで以上に相応しい博物館として邁進していく所存です。



1

展示室準備中



2

◆新規入会館紹介◆

八王子市こども科学館（サイエンスドーム八王子）

八王子市こども科学館 森融

八王子市こども科学館（愛称：サイエンスドーム八王子）は、子どもたちにプラネタリウムを通して天文や宇宙、基礎物理を中心とした展示物を操作することにより科学の原理や応用、そして、各種の科学教室に自ら参加しての科学の理論の学習する機会を提供する場として、平成元年1月28日に開館しました。

施設の内容として、1階が、プラネタリウムと基礎物理を中心とした展示物、2階が、鏡や映像をテーマにした展示物、電子顕微鏡室、科学実験ショーや来館者の休憩所としてのオリエンテーションホール、パソコン教室と会議室、3階が、星空観望広場、地下1階が、科学工作室、屋外が、八王子の地質図と4地点の地層モデルを配置しています。

特に、基礎物理の展示物は、「電気と磁気」、「波動」、「光と波」、そして「力と運動」の4つのテーマで、展示物を自ら操作して科学の原理を体験するものです。

平成21年1月に開館20年を迎えました。バブル経済の崩壊による経済状況の低迷の影響を受け、市財政状況が厳しい中においても、一部ではありますが展示物の更新を進めました。

特に、平成19年度においては、多摩地域でいち早くデジタルプラネタリウムを導入しました。

近年、デジタルプラネタリウムの登場によりプラネタリウムの状況も一転しました。

デジタルプラネタリウムは、動画再生機能を有し、迫力ある全天周映像が投影できます。また、当館のプラネタリウムは三次元デジタルプラネタリウム機能を搭載し、最新の科学データに基づいた様々な天体の位置や距離、大きさの情報をリアルタイムに計算しながら、天体の正確なシミュレーションができます。

宇宙空間を自由に移動したり何十万年もの時間を移動したりと、宇宙船やタイムマシーンから見たような宇宙の空間が体験できます。

そして、平成20年3月22日にリニューアルオープンをし、好評をいただいております。

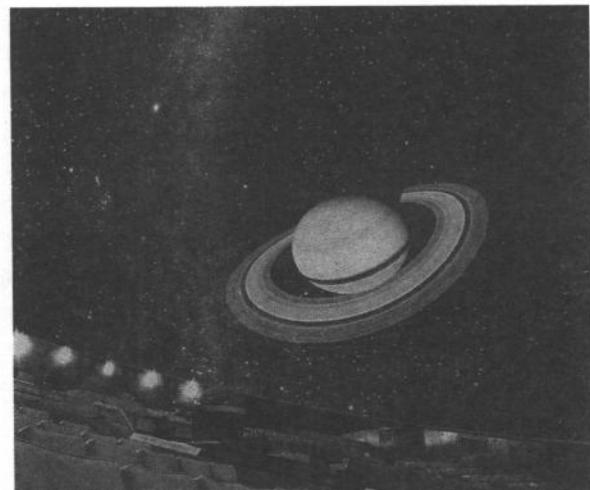
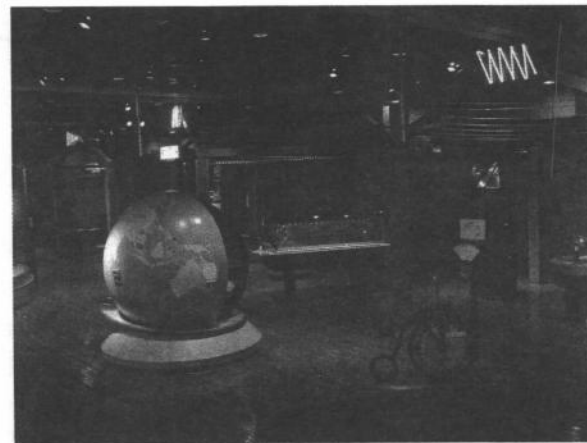
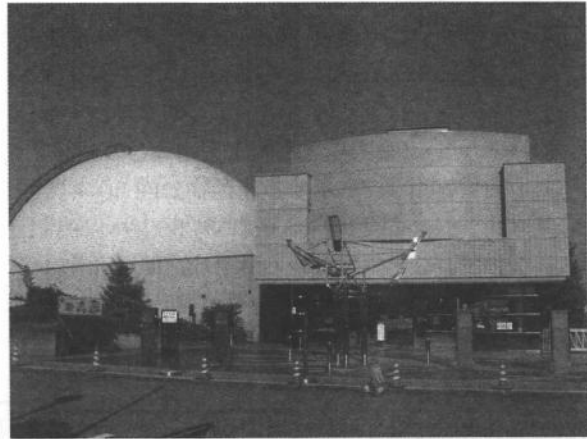
現在の事業の主たるものは、プラネタリウム学習投影（幼児、小学4年生、中学3年生）、と一般投影、科学工作などの工作教室、科学実験ショー、パソコン教室（小学生、幼児と保護者、一般と高齢者対象）の開催などです。

現在の利用者の状況を見ると、開館当初と比べ、小学低学年が多くなっています。特に、科学工作教室などは低学年の要望が多くなっています。

今後の課題は、来館者のニーズに合わせた講座などを開催することや、展示物の更新、そして、プラネタリウムの座席の更新を図り、観覧環境の改善が課題となっています。

三多摩公立博物館協議会への加入により、科学館の活動の幅を広げることが出来ればと考えています。

また、当協議会には、プラネタリウムを有する会員が3館ありますので、プラネタリウムでの連携を図ればと期待しています。今後ともよろしく願いいたします。



◆東京都三多摩公立博物館協議会会員名簿◆

館名	住所	電話	交通
東村山ふるさと歴史館	東村山市諏訪町 1-6-3	042-396-3800	西武新宿・国分寺線「東村山駅」西口下車徒歩 8 分
八王子市郷土資料館	八王子市上野町 33	042-622-8939	JR 八王子駅南口から徒歩 15 分・京王バス市民会館経由「西八王子駅」行、バス停「市民会館前」下車すぐ JR 中央線「八王子駅」北口・京王線「京王八王子駅」からバス「市民会館」下車徒歩 3 分
府中市郷土の森博物館	府中市南町 6-32	042-368-7921	京王線・JR 南武線「分倍河原駅」から健康センター行きバス「郷土の森」下車
町田市立博物館	町田市本町田 3562	042-726-1531	小田急線 JR 横浜線「町田駅」から藤野台団地行きバス「市立博物館前」下車
青梅市郷土博物館	青梅市駒木町 1-684	0428-23-6859	JR 青梅線「青梅駅」下車徒歩 12 分
調布市郷土博物館	調布市小島町 3-26-2	042-481-7656	京王相模原線「京王多摩川駅」下車徒歩 5 分
瑞穂町郷土資料館	西多摩郡瑞穂町石畑 1962	042-568-0634	JR 八高線「箱根ヶ崎駅」東口下車徒歩 20 分
奥多摩水と緑のふれあい館	西多摩郡奥多摩町原 5	0428-86-2731	JR 青梅線「奥多摩駅」から小内方面行きバス「奥多摩湖」下車
福生市郷土資料室	福生市熊川 850-1	042-530-1120	JR 青梅線「牛浜駅」東口下車徒歩 7 分
武蔵村山市立歴史民俗資料館	武蔵村山本町 5-21-1	042-560-6620	多摩モノレール「上北台駅」から武蔵村山市内循環バス三ツ木地区会館行き「村山温泉かたくりの湯」下車徒歩 1 分
あきる野市五日市郷土館	あきる野市五日市 920	042-596-4069	JR 五日市線「武蔵五日市駅」下車徒歩 17 分
羽村市郷土博物館	羽村市羽 741	042-558-2561	JR 青梅線「羽村駅」西口下車徒歩 20 分 / コミュニティバスはむらん羽村西コース「郷土博物館」下車
清瀬市郷土博物館	清瀬市上清戸 2-6-41	042-493-8585	西武池袋線「清瀬駅」北口下車徒歩 10 分
立川市歴史民俗資料館	立川市富士見町 3-12-34	042-525-0860	JR 中央線「立川駅」南口から立川駅北口行きバス「農業試験場前」下車徒歩 5 分
檜原村郷土資料館	西多摩郡檜原村 3221	042-598-0880	JR 五日市線「武蔵五日市駅」から小岩行きか藤倉行きバス「資料館前」下車
日野市郷土資料館	日野市程久保 550	042-592-0981	京王線・多摩モノレール「高幡不動駅」から百草団地方面行きバス「高幡台団地」下車徒歩 5 分
小金井市文化財センター	小金井市緑町 3-2-37	042-383-1198	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口からココバス北東部循環⑩「小金井公園入口」下車徒歩 5 分
くにたち郷土文化館	国立市谷保 6231	042-576-0211	JR 南武線「矢川駅」下車徒歩 8 分
東大和市立郷土博物館	東大和市奈良橋 1-260-2	042-567-4800	西部拝島線「東大和駅市駅」からダイヤモンドシティ行きバス「八幡神社」下車徒歩 2 分 / 多摩モノレール「上北台駅」からちよこバス外回り「郷土博物館入口」下車徒歩 2 分
バルテノン多摩歴史ミュージアム	多摩市落合 2-35	042-375-1414	京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 分
東京農工大学科学博物館	小金井市中町 2-24-16	042-388-7163	JR 中央線「東小金井駅」南口下車徒歩 9 分
江戸東京たてもの園	小金井市桜町 3-7-1	042-388-3300	JR 中央線「武蔵小金井駅」北口から西部バス「小金井公園西口」または関東バス「江戸東京たてもの園前」下車
たましん歴史・美術館	国立市中 1-9-52	042-574-1360	JR 中央線「国立駅」南口前
御岳美術館	青梅市御岳本町 1-1	0428-78-8814	JR 青梅線「御嶽駅」下車徒歩 20 分
東京都埋蔵文化財センター	多摩市落合 1-14-2	042-373-5296	京王線相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール「多摩センター駅」下車徒歩 5 分
集合住宅歴史館（都市再生機構都市住宅技術研究所）	八王子市石川町 2683-3	042-644-3571	JR 中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」から宇津木台行きバス「ケンウッド前」下車徒歩 5 分
多摩六都科学館	西東京市芝久保町 5-10-64	042-469-6100	西武新宿線「花小金井駅」北口下車徒歩 18 分 / 西武新宿線「田無駅」北口からはなバス「多摩六都科学館」下車
国立ハンセン病資料館	東村山市青葉町 4-1-13	042-396-2909	西武池袋線「清瀬駅」南口から久米川駅行き・所沢駅行きバス「ハンセン病資料館」下車
八王子市こども科学館	八王子市大横町 9-13	042-624-3311	JR 中央線「八王子駅」・京王線「京王八王子駅」北口から西東京バス「杏林大学」・「戸吹」・「みついで」行き等「福祉会館」下車徒歩 2 分

東京都三多摩公立博物館協議会会報

ミュージアム多摩 No.30

発行日 2009年3月31日

発行 東京都三多摩公立博物館協議会
2008年度会長調布市郷土博物館
東京都調布市小島町 3-26-2

印刷 ヒラツカ印刷社

編集委員 東村山ふるさと歴史館 大藪裕子
多摩六都科学館 廣瀬明子
国立ハンセン病資料館 高野弘之
八王子市郷土資料館 齋藤義明